

比較文化会報

Nov. 1990 No.11

本部事務局 青森県弘前市稔町13-1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線 19

発行者 椎野正之
編集者 引地岳雄

北摂の緑と白亜のキャンパス 〜次回大会会場の紹介〜

関西支部副支部長 畠中康男

平成三年六月一日、第十三回大会開催予定の会場校、梅花短期大学と、その所在地である茨木市を簡単に紹介し、会員諸氏の歓迎の言葉にかえたい。

明治十一年(一八七八)、アメリカ留学から帰国してキリスト教伝道活動に携わっていた澤山保羅を中心として、大阪市内の土佐堀に女学校が誕生した。入学者は十五名。校名は女学校開設に尽力した梅本町教会の梅と、浪花教会の花をとって、「梅花女学校」と命名された。

自給論を唱えた澤山保羅は貧しい生活に耐えながら、祈りのうちに教育と伝道に専念したが、三十四才で夭折し、その後を宮川経輝、三宅荒毅、成瀬仁蔵などが校長として女学校の運営を支えた。成瀬仁蔵は日本女子大学の創立者として知られている。

明治四十一年(一九〇八)、校舎を大阪市北部の北野の地へ移し、高等女学校、女子専門学校などの女子高等教育に力を注いだ。やがて生徒数も増加して校舎も手狭になったので、大正十五年(一九

二六)、大阪府下の豊中市へ移転。現在、大阪随一の閑静な住宅街にある豊中学園には、学園本部と高等学校、中学校、幼稚園がある。

戦後の学制改革で、女子専門学校は短期大学として発足し、昭和三十九年(一九六四)、茨木市に四年制の女子大学が開設された。緑豊かな北摂の山並のふもとにある茨木学園の土地は、梅花学園のキリスト教教育実践のためにと、ある篤志家から無償で寄付されたものである。その後、豊中学園にあった短期大学も茨木学園に移転。現在、この学園には梅花短期大学と梅花女子大学、同大学院があつて、緑の木々の中に白亜の校舎が点在するキャンパスは三、五〇〇人程の学生で賑わっている。

学園創立一〇周年を記念して、昭和六十三年(一九八八)に完成した澤山記念館にはチャペル、講堂、学園資料展示ホールなどがあつて、是非とも見ていただきたい建物。学内には四季の花の絶えることがなく、若い学生たちと美しさを

競っている。クリスマスが近づくと、大きなクリスマス・ツリーが飾られ、賛美歌が静かに聞こえてくる。

茨木市は吹田市とともに、大阪の北部に位置する衛星都市で、昭和四十五年(一九七〇)の万博で賑わったところ。人口は約二〇万人。慶長年間(一五九六一一六一五)に片桐且元の城下町として、また、京阪神の交易の中心地として栄えた。現在、産業道路として交通のはげしい西国街道(国道一七二号線)沿いには、電気機器、化学、医薬品、食品工業などの工場や倉庫が建ち並ぶ。

梅花短期大学のキャンパスの周辺は宿久庄と呼ばれ、川端康成の生家があり、近くの「川端康成文学館」にはいろいろな記念品が展示されている。また、徳川時代に参勤交代の大名が泊まった「椿の本陣」があり、昔の大名行列を偲ばせる万博会場跡の「国立民俗博物館」、「日本庭園」などは素晴らしい。特に、「国立民俗博物館」は世界中から集めた民俗文化財の展示がとても興味深い。

大阪は「くだおれの町」といわれるが、残念ながら、茨木にはこれといって勧める食べ物もない。隣の吹田市にはアサヒ・ビールの大きな工場があるから、アサヒ・スーパー・ドライなら、いくらかでもどうぞ。

(梅花短期大学教授)

山浦拓造先生の想い出

佐藤 幸 正

昨年十二月十八日、山浦初代会長が肺炎のため、八十六歳で亡くなられました。心から御冥福を祈ります。

山浦先生は、東北学院大学を退職後、昭和四十五年弘前学院短期大学の教授として迎えられ、翌四十六年大学発足と共に、英米文学科の初代科長として重責を全うされました。この間、研究や教育に、そして同僚のリターとして、精力的な活動をされ、昭和六十二年三月、弘前学院大学を退職されました。退職後は奥様と奈良市に移られ、平和に過ごしておられました。

日本比較化学会発足時（昭和五十四年六月）以来、二代目会長の誕生（昭和六十一年六月）に至るまで、実に七年の間、会長として、山浦先生には大変お世話になったわけで、学会といたしましても厚く御礼申し上げる次第である。学会設立準備委員会の前段階で、既に私共の腹の内では会長は山浦先生と決定していたわけだが、頼まれればいやとは言えぬ御性格の先生は、これを快くお引き受け下さった。誠に有難いことであった。研究室には殆んど毎日通われ、常に原稿をお書きになっていた姿が想い出される。用件でおじやますといういろいろな話題に及び、つい長居するのが常であった。あのにこやかな、人なつこい笑顔、過去の苦勞話し、どれもみななつかしく想い出される。（弘前学院大教授・英文学）

日本学術会議登録
かねてより登録事務をすすめてきた本

学会の日本学術会議登録が一九九〇年九月上旬認可された旨日本学術会議会員推薦管理会より通知があった。今回は第十五期であり、三年後の第十六期にむけては再度申請の必要がある。

本学会の関連研究連絡委員会は、文化人類学・民俗学の分野に届け出ている。それに伴って今後指定期日までに諸々の手続をすることになるが、今回は本部署事務局会議で左記三名の会員に依頼することとした。

- 一、会員候補者 芳賀馨（福島県立医大教授）一月三十一日まで提出
 - 二、推薦人 西村清巳（弘前大医療技術短大部教授）二月二十日まで
 - 三、推薦人予備者 太田敏雄（新潟学園女子短大教授）二月二十日まで
- いづれにしろ、学会としての堅実な活動が正式に認められたこととなり、今後の会員一同の積極的活動が期待される。

三浦尚之教授の活躍

本学会南東北支部会員、三浦尚之・福島女子短大教授（国際交流委員長のニューヨークにおける活躍ぶりが大きく「福島民報」（四月八日）、「朝日新聞」（三月十日）に掲載されたので「民報」の記事の一部を紹介する。

日本の現代音楽をアメリカに紹介しようとして、ニューヨークで十五年間活動を続けている福島女子短大教授三浦尚之（なのおゆき）さん（四八）がことし一月から三月にかけて、カーネギーホールなどで「ミュージック・フロム・ジャパン十五周年記念コンサート」を開催した。現地のワシントン・ポストやニューヨーク・タイムズが紙面を大きくさい

て報道するなど日米文化交流に大成功を収めた。このほど帰福した三浦さんは、二月二十三日に開いたメーンの交響曲演奏会を振り返り「難しい曲を現地のアメリカ人が最後まで熱心に聴いてくれました」と熱っぽく語っていた。

米沢のぶ子氏「なごり裂織展」
本学会々員・米沢のぶ子氏の裂織展について「河北新報」（八月三日・夕刊）」に次の記事があったので紹介する。

津軽の風土を織物に込めて
黒石市の染織家・米沢のぶ子さん（四六）と友人たちによる「津軽なごり裂（ぎれ）織」の展覧会が四日まで、河北新報社新館、河北ホールで開かれている。

古くなった浴衣やふろしきを細く裂いて、再び布地として織り直す裂（さき）織。米沢さんは、愛着のある布を名残惜しんで織り上げることから「なごり裂織り」と名づけた。

津軽の風土にはぐくまれた深い藍（あい）色の壁掛け、スコットランドのタータンチェックに似たテーブルセーターなど約四十点を展示。色あせた布も、新鮮な感覚の織物に変身、訪れた人々は感嘆の声を上げている。

西村清巳氏の出版記念会

学会副会長の弘前大学医療短大教授西村清巳氏がJACCから「英語理解の「点」と「線」第二版」を出版された。それを記念して、五月十二日弘前市城東のレストラン・キャメルで青森英語談話会の会員を中心に出版記念会を開いた。

会員新刊紹介

石黒昭博・島中康男共著

A Shorter Course in Translation (『5分間英和翻訳』) 南雲堂

本書は英和翻訳の際に留意すべき基礎的なキー・ポイントを四十題とりあげ、解説や練習問題を付して翻訳作業の手助けをしたもので、翻訳技術の向上に最適。石黒昭博・島中康男共著

A Shorter Course in Writing Good English (『5分間英文作法入門』) 南雲堂

本書は三部から成っている。第一部は基本的な英語の句読法の解説と練習、第二部はいわゆる表現文法の概略、第三部は英語修辭法の基本項目という構成である。英文文クラスのテキスト、副テキストとして最適。島中康男・小宮山博 編注

The Canterbury Tales of Geoffrey Chaucer (『私たちのカンタベリー物語』) 英宝社

若い読者のためにHeath夫妻が現代文に書き直して出版したもの。日本の学生が読んでわかりやすく、それに「騎士の物語」や「パースの女房の物語」などポピュラーなものが収められている。オーディオ・テープ有り。

石黒昭博・フィリップ・ウィリアムズ著
My American Trip: San Francisco & Los Angeles (『私のアメリカ旅行—シスコ・ロス』) 南雲堂

本書は、西海岸旅行を企てる人たちにS・F、L・Aの二つの町の見所を紹介し、また過去の旅行で忘れられない思い出を残しておられる人々には郷愁を呼

び起こさせるようにと目論んで編まれた英語テキストである。ビデオ・テープ、オーディオ・テープ有り。

引地岳雄 訳

『実例による医学英語論文の書き方』文章構成のポイント』メジカルビュー社
本書は、月刊Medical Englishに連載するため、ビョーク(R. E. Bjork)氏が書き下ろしたものを、連載終了後改定増補したものである。本書の顯著な特色は文章を構築する仕方の伝授にある。言葉大きな単位でとらえ、それを完成させるために文、語といった小さな単位をどう処理すべきかを論じたもの。

西村清巳 著

『英語理解の「点」と「線」』(第二版) 日本比較文化学会
本書は文法項目のすべて網羅しているものではないが、英語には、単語の段階から構文の段階に至るまで、統一的ルールが働いていることを示し、一歩突っ込んだ英語の理解を目指したものの。

佐藤憲和 著

『英詩の約束ごとと鑑賞』日本比較文化学会
英詩概論のテキストは幾分市販されているが、本書は、著者の実際の経験から学生の理解し易い詩を精選し配置してある。英詩についての概説もわかり易いし、日本やヨーロッパの詩との比較対照を試みた著者の意図はユニークである。

奥村訓代・松本節子共著

『コンテンポラリー日本語(中級)』桜楓社
外国人に対する日本語教育の重要性が力説されている昨今、時宜を得た好著である。著者の教育経験が生かされている。

奥村訓代 他共著

『戦後日本の政治制度と状況』京都外国語大学留学生別科発行
言葉の学習にその言語の社会的・文化的背景の理解は必須の要件であるが、その点をふまえて而も解り易く編纂されている。

本部事務局が把握した範囲での紹介なので、その他にも会員各位の新刊書が数多くあると思われまます。会員からの本部事務局宛のご連絡をお待ちしています。

会員近況報告

西村清巳

会議出席と研究資料収集のため、母校ハワイ大学を訪れて参りました。日本人学生の多さと、大学図書館の施設の立派さと開放的なのに感銘をいたしました。(弘前大学医療短大教授・学会副会長)

佐藤 憲和

「Jingle」は擬声語で、辞書には「ナイチンゲールなどのじゃっ、じゃっという鳴き声のこと」という説明が載っている。特に美しいとも思えないこの鳴き声が文学では、古来、たえなる調べとされてきている。現実の無粋な鳴き声とは無関係に、神話などの連想から世の詩人によって形成された豊かな世界が確かに存在している。この夏休みはそのことを調べて見ようと思っている。

(弘前大学教授・英文学)

芳賀 馨

八月下旬、オーストラリアの大都市を数市訪ねて来た。英国から派生して今なお英国的な名残りを有しつつも、オーストラリアの独自性を発揮しようとする

都市を、時間的異相をふまえて、アメリカの都市ワシントン(キャンベラ)、フィラデルフィア(メルボルン)、ニューヨーク(シドニー)などと対比して考察することも有意義だったと思う。(福島県立医大教授・米文学)

引地 岳雄

American Medical Writers Association
に本年十月一日付で入会。十月三十一日から十一月三日までロサンゼルスで催される年次大会に出席。次のWorkshopに参加。
Organizing the Biomedical Paper Manuscripts Other Than Journal Articles
Outlining for Writers and Editors
Writing Abstracts
大会後、ハワイに立ち寄り、Brigham Young University-Hawaii
Norman Temple
Polynesian Cultural Center
などを視察して、十一月八日帰国。(福島県立医大教授・医学英語)

鈴木 美恵子

七月末から八月上旬にかけて、今私が研究しているアメリカのテレビドラマ作家・アラン・E・スローン氏を彼の自宅に訪ねた。研究のための色々な資料を頂いたり、インタビューをさせて頂いただけでなく、彼の自宅にも泊めて頂いて感激して帰国した。今後の研究に役立てていい仕事をしたいと思う。(県立須賀川養護学校教諭・アメリカ文学)

支部活動報告

関東支部
日時 十一月二十五日(土)

場所 放送大学群馬学習センター
報告事項 昭和六十三年年度会計報告
シンポジウム
テーマ 「外から見た日本」
発言者 James Kee
コメンテーター 下田尾誠
佐藤公彦

Maurice Jaquet
講演 野口周一「モンゴル高原の遊牧」
(スライド使用)

南東北支部(えびすグランド・ホテル)
一九八九・三・二十四
地球外知的生命との交流 小野 和久
オペラの主役はだれなのか 上野 龍夫

一九八九・七・二十
環境危機と人類の選択について考える 菊田 正博
日本および韓国における食行動―食事作法について 芳賀 文子

一九八九・十二・二十
イメージ 高橋八重子
九八九・十二・一
小・中学生時代の私(忘年会テーマ)

関西支部
一九八九年度
四・二十二 The Adventures of Huckleberry Finnの構造をめぐって 森下 和彦
Some Remarks on Modification 山内 信幸
文化研究のテキストとしての絵画―ウインズロー・ホーマーの場合 佐々木 隆

講演
五・十三 絵画名詞句について 伊藤 徳文

On Psych-Verbs
友次 克子
Truman Capote とエドヤ
人—もしくは一つの文芸論
吉川 礼三

六・十七
"Y NOT C I M U R N-
M.E."
"R U?"
"O.S.N.D."
——広告英語と判じ物
加藤 靖弘

ナチュラル・アプローチと
クラシエンの仮説について
小笠原真司

講演
十七世紀ドイツにおける普
遍文法の構想 高田 博行
Lord Jim とおける Marlow
の役割について
五井 久之

講演
Blake's Vala or the Four
Zoas: the Four-fold World
and Myth 為後 孝子
翻訳・色は匂へど Part
II—「奥の細道」の英訳
をめぐって 釜池 進

九・三十
Dickens の小説における過
去の意識—中期の小説を中
心として 玉井 史絵
日本語における言語使用感
依存—一つの体系文法的モ
デル 村上扶美枝

講演
体制の比較—Capitalism
versus Socialism
浜田 清夫

十・十四
James Thomson の "Winter"
における「苦悶」をめぐっ
て 山本美津子

Hemingway's The Short
Happy Life of Francis
Macomber: American Boy-
Men をめぐって
杉田トモ子

講演
Romeo and Juliet を読む
小宮山 博

十一・十八
Ulysses にみる James Joyce
の言語観について
田村 章

Presupposition と Grammar
について 太田 智子
物語における旅の要素
島中 康男

十二・十六
The Nature of the Heart
in Hawthorne's The Scarlet
Letter 藤田 淳一
フームスと The Killers
河井 恵子

講演
テキストの成立について
石黒 昭博

一・十三
Modal Logic and Tense
in English 西山 淳子
『アメリカの嘆き』と
Huckleberry Finn
森下 和彦

講演
池袋清風の和歌と英学
河野 仁昭

三・十
A Connecticut Yankee in
King Arthur's Court とその
樂園について
筑後 勝彦

エリオットとフランス印象
派詩人 佐野 仁志
Do Adverbs Come from
Adjectives or vice versa?
山内 信幸

戦時下の英語・英文学—体
験的昭和史の—Iコマ
太田 幹雄

一九九〇年度
四・二十八 On Gerunds 川本 裕未
Andrew Marvell の「画廊」
を読む 植月 恵一郎

講演
Grammatical Metaphor
—その意義と分析試論
龍城 正明

五・二十六
Remarks on the Proper
Characterization of Indirect
Objects and Particles in
English 伊藤 徳文
On Stative Predicates
友次 克子

講演
ブリテン島文学漫歩
植月 徹

六・三十
概念伝達のための通訳訓練
竹本美穂子
Nature in E. M. Foster's
A Passage to India
高木あゆみ

講演
英語の興味—関心を引き出
すための一つの試み
広瀬 方人

七・二十
Hawthorne の The Blithedale
Romance について
—フュニニスム的観点から
谷本千雅子

講演
Marlow の経験の意味—
Heart of Darkness について
の考察 玉井 久之

イギリス文学と家について
島中 康男

本部事務局だより

日本学術会議登録を会員一同と共に喜
びたい。十一月二十一日には、芳賀・西
村・太田三代が学術会議講堂での説明会
に出席した。本学会の整備すべき諸々の
問題を指摘して、来年六月の総会にむけ
て各位の論議に期待したい。

・本部事務局の移転

学会発足以前から十数年弘前学院大が
引き受けて来たが、この際移転を考えた
い。更に、出来るだけ本部事務局の仕事
量を減していく必要がある。

・大会準備委員会の設置

第十二回大会は、南東北支部(福島県
立医大)を中心に大会準備委員会を設置
し大会運営の殆ど総ての業務(①大会場
設置、②プログラム製作、③レジュメ集
発行、④パーティ設定など)を担当した
が、第十三回大会も概ね関西支部(梅花
短大)がその趣意を了解している。この
慣行を総会で決定したい。各支部の自主
性が尊重されることになる。その際、現
行の予算規模からみて約十萬円の補助金
が出せるはずである。

・学生会費

学術会議の規定では、学部・短大学生
を会員総数には算入しない。大学院生以
上となっている。本学会の会員資格は当
初から学部・短大生も認めているので、
学生会費を学部・短大生のみにも適用し
生の会費は一般会員と同額にしたい。

・役員人事

学術会議登録・本部事務局移転の関連
で、ある程度の役員人事変更の必要があ
る。事務局としても検討中である。
(本部事務局会議記録より)